國學院大學学術情報リポジトリ

楚辭「離騷」「好脩」管見

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-25 キーワード (Ja): 好脩, 獨, 離騷, 荀子, 詩經 キーワード (En): 作成者: 木村, 剛大 メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/2000224

楚辭「離騷」「好脩」管見

木村剛大

一、はじめに

筆者はこれまで、楚辭「離騷」中の言辞表現に着目するという手段で、「離騷」に発現する「文学的個性」に対して検討を加えてきた。この「文学的個性」とは、言辞受容者に対して「作為」や「作者」を想起させる要素と、ひとまず定めておく。「文学的個性」検討に於いては、屈原という個人に言辞を託す、「属人的個性」に拠る解釈との峻別に注意する。換言するならば、本稿に於いて、「文学的個性」を検討する際に、筆者は屈原という個人の存在は問題としない。あくまでも言辞表現の中に、個別性或いは特異性、つまり「文学的個性」を見出そうとする立場を採る。本稿は「好脩」表現の特徴を確認することで、「離騷」に発現する「文学的個性」の一端に対する指摘を試みるものである。

古代に於ける「作為」や「作者」という概念に対する検討は、『詩經』から楚辭にかけての、先秦文学の様相を考える端緒となると思われる。したがって、筆者は「文学的個性」を問題とするのである。また、「離騷」を検討対象とするのは、言辞中に強烈な情念の発露という独自性と、その強烈な情念に基づく特異な表現が確認されるからである。さらに言辞と「属人的個性」とが結び付く解釈が、中国文学史上、早期の段階で確認されるのが「離騷」だからである。

楚辭「離騷」に於いて、「余」に反俗の性質を見出す場合、「余」と「俗」との区分は、「好脩」であるか否かという点にあろう。以上については、拙稿「楚辭「離騷」「俗」義初探」(『國學院中國學會報第六十七輯』・國學院大學中國

學會・令和三年十二月）に於いて既に指摘した。

本稿では、上掲の拙稿の内容を踏まえた上で、「離騷」に於ける「好脩」について私見を述べたい。すなわち端的に言えば、「離騷」に於いて、反俗なる「余」を前提とした場合、「好脩」がいかなる特徴を有する表現であるかについて考えたい。これが本稿の問題の所在である。

以下、楚辭各篇の底本には、『屈原集校注』（金開誠等著・中華書局・中國古典文學基本叢書・一九九六年）、及び『楚辭集校』（黄靈庚集校・上海古籍出版社・二〇〇九年）を適宜參照した。

二、先行研究について

「離騷」に於ける「脩」についての先行研究は、ここで取り上げるべきものとして、殷光熹氏『楚辭論叢』（雲南人民出版社・二〇一四年）に所収の論稿「『離騷』〝修〟字例釈」（該書九七頁から一〇一頁）がある。[1] 殷氏は、「修」字[2]の用例について、「修能」・「修名」・「修姱」・「復修」・「信修」・「蹇修」・「前修」・「靈修」・「修遠」・「好修」を挙げる。殷氏は各用例について、楚辭の他篇での例や、その他の文献の例を挙げて言及する。しかしながら、「好修」に対しては、

〝好〟、喜好也。〝好修〟、好為修飾、如芰荷為衣、芙蓉為裳、高冠長佩之類、實際是指好修美德以為常行。

（該書一〇〇頁）

右のような言及に留まり、「好修美德」と示すのみである。他の「修」を含む語については、『詩經』・『莊子』・『戰國策』などから、その用例を丁寧に挙げるが、「好修」については、用例数も多くないためか、上掲の指摘のみに留まる。しかしながら、「好修」と「美德」とが並列する殷氏の指摘は注目に値する。後述するように、「離騷」に於ける「好脩」とは、「余」が自己と他者とを区別する要素を有すると想定される。また、「好脩」とは「余」の「獨」なる状態をも示すと考えられる。殷氏の指摘からは「美德」の具体的内容は示されないが、殷氏は「好脩」に「美德」を読み取り、それらを「常行」とするか否かという点に対して、「余」にとっての自他の区別の基準を認めたのではないだろうか。

また、小南一郎博士は『楚辭とその注釈者たち』（朋友書店・二〇〇三年）「第一章 楚辭の時間意識」に於いて、「恐脩名之不立」句の「脩名」について、以下のように指摘する。長くなるが、重要な指摘であるため引用する。

〝脩名〟は、良き名と釈されるが、世間的な名声の意味ではないだろう。脩・修の字は、長いというのが元来の意味だとされ、楚辞文藝の中で、価値的な形容語として盛んに使われている。すでに〝霊脩〟の語が見えたが、この段にも、古い時代の優れた人物の意で〝前脩〟の語が使われている。脩・修は、聖なるもの、永遠に価値を持つものを意味する語であったと推測される。脩が長いと釈される、その長さは、永遠、無限大につながる長さなのであった。たとえば、秦の始皇帝が建てた会稽山碑文（史記秦始皇本紀）に、「皇帝はすばらしい功績を立て、天下を統一し、その徳恵は修長である（皇帝休烈、平一宇内、徳恵修長）」とある修長の語には、いつまでも、永遠にという意味がこめられていたであろう。

〝脩名〟を立てたいというのは、過ぎゆく時間の中にありながらも、永遠なるものの上に自分の存在を刻みこみたいという願望である。そのために主人公が則るのは、前の世にあって、すでに永遠なるものに参入できた人々の〝遺則〟なのである。しかし、世俗とは異なる価値観を信奉することの代償として、人々の理解は得られず、主人公は〝此の時〟の中では行き詰まり、孤独であり、深い憂いに沈まざるを得なかった。

（該書一三九頁）

小南博士は、「長い」という「脩」元来の意味を「永遠、無限大につながる長さ」と捉え、そこに主人公の「永遠」への冀求を見出す。それに従い、「脩」を「聖なるもの、永遠に価値を持つものを意味する語であった」と推測し、加えて、「脩」を冀求した代償としての、主人公の「孤独」まで指摘する。筆者は小南博士の以上の指摘には大いに啓発された。「脩」についての大筋の理解は、充分に首肯するに足り得る。小南博士の指摘する「世俗とは異なる価値観」が、楚辞「離騒」に於ける「文学的個性」の根幹であると筆者は想定する。「脩」の冀求、言い換えれば、「好脩」であることによって、「余」は「孤独」という代償を負うのではないか。次項以下、先秦文献の一部と「離騒」との「好脩」表現を比較し、「離騒」に於ける「好脩」表現の特徴を述べる。

三、『荀子』「好修正」にみる対比表現

先秦時代に於ける諸子文献に「好脩」の用例をみると、『荀子』に二箇所確認できる。以下にその例を挙げよう。(3) まず

は卷四「儒效篇第八」の用例である。

以從俗爲善、以貨財爲寶、以養生爲己至道、是民德也。行法至堅、不以私欲亂所聞、如是、則可謂勁士矣。行法至堅、好修正其所聞以橋飾其情性、其言多當矣而未諭也、其行多當矣而未安也、其知慮多當矣而未周密也、上則能大其所隆、下則能開道不己若者、如是、則可謂篤厚君子矣。修百王之法若辨白黑、應當時之變若數一二、行禮要節而安之若生四枝、要時立功之巧若詔四時、平正和民之善、億萬之衆而博若一人、如是、則可謂聖人矣。

俗に從ふを以て善と爲し、貨財を以て寶と爲し、生を養ふを以て己の至道と爲すは、是れ民の德なり。行ひは法しく至は堅く、私欲を以て聞く所を亂さず、是くのごとくなれば、則ち勁士と謂ふべし。行ひは法しく至は堅く、好んで其の聞く所を修正して以て其の情性を橋飾し、其の言は多く當るも而も未だ諭らず、其の行は多く當るも而も未だ安からず、其の知慮は多く當るも而も未だ周密ならず、上は則ち能く其の隆ぶ所を大にし、下は則ち能く己に若かざる者を開道す、是くのごとくなれば、則ち篤厚の君子と謂ふべし。百王の法を修むること白と黑とを辨ずるがごとく、當時の變に應ずること一二を數ふるがごとく、禮を行ひ節を要へて之に安ずること四枝を生らすがごとく、時を要へて功を立つるの巧なること四時を詔ぐるがごとく、平正和民の善は、億萬の衆にして博らなること一人のごとし。是くのごとくなれば、則ち聖人と謂ふべし。

右は「民德」[4]・「勁士」・「君子」・「聖人」それぞれの性質を順に並べて述べる部分である。「好修正」の語は、「君子」の性質について述べる部分に確認される。「君子」の性質を示す部分で「好修正」が用いられる点、「君子」と「從俗」なる「民德」との性質の相違が表現される点に筆者は注目する。この二点は、「離騷」と共通する「好脩」表現であろう。すなわち、「離騷」に於ける「余」は、自己が他者より優れた者として自己誇尚する。換言すれば、「余」は、他者とは異質な存在として自己を認識する。それは例えば、「離騷」に於ける以下の句に看取されよう。

民生各有所樂兮　民生各〻樂む所有り
余獨好脩以爲常　余 獨り脩を好んで以て常と爲す

この両句からは、「離騷」に於ける「余」が、自己を「民生」の一部としては認識していないことが確認できる。「余」と「民生」との区別は、「離騷」に於いては「好脩以爲常」にあると述べられる。以上のように、「俗」や「民生」と

の相違点として、「好脩」が挙げられるのは、「離騷」と『荀子』巻四「儒效篇第八」との共通点であると言えよう。[5]「好脩」が他者との区別、すなわち自己規定の一要件として表現される例が確認できた。次に『荀子』巻七「王霸篇第十一」の例を確認する。

傷國者何也。曰、以小人尚民而威、以非所取於民而巧、是傷國之大災也。大國之主也、而好見小利、是傷國。其於聲色・臺謝・園囿也、愈厭而好新、是傷國。不好修正其所以有、啖啖常欲人之有、是傷國。三邪者在匈中、而又好以權謀傾覆之人斷事其外、若是、則權輕名辱、社稷必危、是傷國者也。大國之主也、不隆本行、不敬舊法、而好詐故、若是、則夫朝廷羣臣亦從而成俗於不隆禮義而好傾覆也。朝廷羣臣之俗若是、則夫衆庶百姓亦從而成俗於不隆禮義而好貪利矣。君臣上下之俗莫不若是、則地雖廣、權必輕、人雖衆、兵必弱、刑罰雖繁、令不下通。夫是之謂危國、是傷國者也。

國を傷つくる者は何ぞや。曰く、小人を以て民に尚として威あらしめ、非所を以て民より取りて巧なるは、是れ國を傷つくるの大災なり。大國の主なるも、好んで小利を見るは、是れ國を傷つく。其の聲色・臺謝・園囿に於けるや、愈〻厭きて新を好むは、是れ國を傷つく。其の有する所以を修正することを好まずして、啖啖として常に人の有を欲するは、是れ國を傷つく。三邪なる者匈中に在りて、而も又好んで權謀・傾覆の人を以て事を其の外に斷ぜしむ、是くのごとくなれば、則ち權は輕く名は辱められ、社稷必ず危ふし、是れ國を傷つくる者なり。大國の主なるも、本行を隆(たふと)ばず舊法を敬せずして、詐故を好む、是くのごとくなれば、則ち夫の朝廷羣臣も、亦從ひて俗を禮義を隆ばずして傾覆を好むに成す、朝廷羣臣の俗是くのごとくなれば、則ち夫の衆庶百姓も、亦從ひて俗を禮義を隆ばずして貪利を好むに成す。君臣上下の俗、是くのごとくならざること莫ければ、則ち地廣しと雖も權必ず輕く、人衆(おほ)しと雖も兵必ず弱く、刑罰繁しと雖も令下に通ぜず。夫れ是れを之れ危國と謂ふ。是れ國を傷つくる者なり。

ここでの「修正」は、宋本では「循正」とあるが、盧文弨に従い改めた。[6]右に於ける「修正其所以有」は「欲人之有」と対になる。つまり、他者の所有を欲せず、自身の所有を「修正」することで、「傷國」を避け得る。当該部分は、「傷國者」について述べた部分であり、「傷國者」は「修正」を好まないと表現される。「儒效篇第八」の例と同様に、「王霸篇第十一」の「好修正」も、価値的な形容語ではない。

そのため『荀子』の「好修正」と「離騷」の「好脩」に於ける「脩」とが同義とは言えない。しかしながら、ここでは「傷國者」が「不好修正」と表現される点に注目したい。先掲の「儒效篇第八」の用例では、「君子」の性質が「好修正」とされ、「王霸篇第十一」の用例では、「傷國者」の性質が「不好修正」とされる。さらに、「儒效篇第八」の用例は「從俗」する「民」との対立項として「好修正」が表現される。すなわち『荀子』に於ける「好修正」は、「民」とは異なる「君子」の性質として表現され、「不好修正」は、「傷國者」の性質として表現される。つまり、『荀子』にみる「好修正」は価値的な形容語ではないが、文脈に従って解釈するならば、その語からは明らかな価値判断が読み取れる。そしてこの価値判断は、次に示すように「離騷」に於ける「好脩」の語に見出し得る価値判断とも共通する。

「離騷」　余＝「好脩」
　　俗＝非「好脩」
『荀子』　君子＝「好修正」（「儒效篇第八」）
　　傷國者＝「不好修正」（「王霸篇第十一」）

右のように、「脩」を軸とした「余」対「俗」、「君子」対「傷國者」、という二者を示す対比表現の面で、「離騷」と『荀子』との「好脩」表現には共通性が認められよう。しかしながら、『荀子』に於いては、「離騷」のように「好脩」で表現されるのではなく、あくまで「好修正」の表現である。しかし、本稿ではこの両者の内容の比較検討には立ち入らず、「好脩」周辺の対比表現という点に於ける比較に留めたい。また、「脩」と「正」とが結び付く背景については、別に論じる機会を得たい。以上の通り、先秦の諸子文献中「好脩」「好修」の用例は、管見の限り『荀子』にみた二例であった。ここまでの検討から、「脩」の性質を認め得る対象は、「俗」や「傷國者」とは乖離した存在であり、その乖離とは、殷氏の指摘する所の「美德」の有無を基準とした区別に拠る乖離であると考えられよう。次に『詩經』に於ける「脩」表現を確認する。

四、『詩經』に於ける「脩」との比較

先秦の諸子文献に加え、「離騷」に先行する『詩經』に於いて、「好脩」が如何に表現されるか検討すべきであるが、『詩經』には、「好脩」「好修」の用例は確認できない。(7) 諸子文献の『荀子』の「好脩」例の「脩」が価値的な形容語

でない点に加え、『詩經』に「好脩」例が確認できない点からも、楚辭に於ける「脩」という価値的な形容語が、「好脩」として表現される例が稀少であるという事実が確認できよう。ここでは「脩」の用例に検討範囲を拡大する。『詩經』に於ける「脩」の用例は十例確認できる。試みにそれらを分類すると以下の通りになろう。

①「脩長」 ②「脩治」 ③「脩徳」

まず①「脩長」の例を確認する。「脩・修の字は、長いというのが元来の意味だとされ」るとは、先に引用した小南博士の指摘にある。『詩經』に於いては、十例の「脩」のうち三例が「脩長」に分類し得る。以下にその例を示す。

中谷有蓷
嘆其脩矣
有女仳離
條其歗矣
條其歗矣
遇人之不淑矣

中谷に蓷(たい)有り
嘆(かん)として其れ脩(なが)し
女有り仳離し
條として其れ歗(うそぶ)く
條として其れ歗くは
人の不淑に遇へばなり

國風・王風「中谷有蓷」

「中谷有蓷」の「脩」については、毛傳では「脩、且乾也。」とするが、朱熹『詩集傳』[8]では、次のように解釈される。

修、長也。或曰、乾也、如脯之謂修也。

修は、長きなり。或いは曰く、乾なり、脯之れを修と謂ふが如きなり、と。

ここで朱熹の示す「修、長也。」の訓詁を採用すれば、当該の「脩」は「脩長」に分類し得よう。ここでの「長」とは、秀逸な様などを指すのではなく、物理的な長さを指す。この他に「脩長」と分類し得る用例としては、以下のものがある。

四牡脩廣
其大有顒
薄伐玁狁
以奏膚公
有嚴有翼
共武之服
共武之服
以定王國

四牡 脩廣
其れ大にして顒(ぎょう)たる有り
薄か玁狁(けんいん)を伐ち
以て膚公を奏す
嚴なる有り 翼なる有り
武の服(こと)に共す
武の服に共し
以て王國を定む

小雅・南有嘉魚之什「六月」

「四牡脩廣」については、毛傳に「脩、長。廣、大也。」とある。ここでは四頭の牡馬の身体が大きく脚も長い様をいうのであろう。毛傳に明らかなように、これも「脩長」の例であろう。この他に大雅・蕩之什「韓奕」にも次のように「脩長」に分類し得る例が確認できる。

四牡奕奕　　四牡 奕奕(えきえき)として
孔脩且張　　孔(はなは)だ脩(なが)く且つ張なり
韓侯入覲　　韓侯入りて覲(まみ)ゆ
以其介圭　　其の介圭を以て
入覲于王　　入りて王に覲ゆ

大雅・蕩之什「韓奕」

「韓奕」の例も先の「六月」同様、「四牡」の充実を表現する語として「脩」が用いられる。なお、毛傳では「奕奕、大也。」に加え、「脩、長。張、大。」と指摘される。先に示した①～③の三分類のうち、①「脩長」のみが形容語である。その内「六月」「韓奕」の二例は、対象となる「四牡」を褒誉する文脈ではあるが、「脩」には物理的な長さを表す「長」意が読み取られるのみである。しかしながら、二例は共に対象の長さを以て、対象の充実さを示す「脩」である。充実さを表現する「脩」の性質に着眼すると、「脩」は冀求対象となり得よう。

『詩經』に於ける「脩長」の例には、小南博士が「会稽山碑文」を例に指摘する「永遠、無限大につながる長さ」は確認できない。しかしながら、この点に、『詩經』と「離騒」との相違を見出し得よう。この相違に「離騒」「脩」表現の独自性が表出するのではないだろうか。

続いて、②「脩治」に分類し得る用例を確認する。「脩治」の用例は対象をもつ動作として表現され、①「脩長」のように価値的な形容語とは認識し難い。以下にその例を挙げる。

豈曰無衣　　豈に衣無しと曰はんや
與子同袍　　子と袍を同うせん
王于興師　　王(ここ)于に師を興す
脩我戈矛　　我が戈矛を脩め
與子同仇　　子と仇を同うせん
豈曰無衣　　豈に衣無しと曰はんや
與子同澤　　子と澤を同うせん
王于興師　　王(ここ)于に師を興す
脩我矛戟　　我が矛戟を脩め
與子偕作　　子と偕に作(た)たん
豈曰無衣　　豈に衣無しと曰はんや
與子同裳　　子と裳を同うせん
王于興師　　王(ここ)于に師を興す
脩我甲兵　　我が甲兵を脩め
與子偕行　　子と偕に行かん

国風・秦風「無衣」

三度畳詠される「脩我〇〇」の句が、「修治」に分類した「脩」

の例である。いずれも「戈矛」・「矛戟」・「甲兵」という武具が「脩」の対象となる。疏には「脩治我之戈矛」とあり、ここでの「脩」を「脩治」とする。したがって筆者は②の分類を「脩治」とした。文脈に於いては整備・準備などの意で捉えられよう。この「無衣」の例と同様に、「脩治」、すなわち整備の意で捉えられる「脩」の用例を以下に挙げる。

作之屏之　之れを作し之れを屏するは
其菑其翳　其の菑 其の翳
脩之平之　之れを脩め之れを平ぐるは
其灌其**栵**　其の灌 其の**栵**
啓之辟之　之れを啓き之れを辟くは
其檉其椐　其の檉 其の椐
攘之剔之　之れを攘ひ之れを剔るは
其檿其柘　其の檿 其の柘

大雅・文王之什「皇矣」

以上は天帝が文王の聖徳を知り、岐周の地へ遷る際、険隘な岐周の地が整備されるという内容である。「脩」と「平」の対象となるのは、それぞれ「灌」と「**栵**」であるが、この部分について朱熹『詩集傳』では以下のように指摘する。

脩・平、皆治之使疏密正直得宜也。灌、叢生者也。**栵**、並生者也。

脩・平は、皆之れを治めて疏密正直をして宜しきを得しむるなり。灌は、叢生する者なり。**栵**は、並生する者なり。

この朱熹の解釈からも、当該の「脩」が「脩治」の意であることが確認できる。「皇矣」の「脩」例もまた価値的な形容語ではない。ただし、「脩」の結果として「得宜」が期待されると朱熹が解釈する点には注目したい。当該の「脩」という行為が「得宜」を導くならば、「脩長」にみた、内容の充実さを示す例と同様に、「脩」が冀求対象となり得るからである。この他にも「脩治」に分類される例を以下に示す。

脩爾車馬 弓矢戎兵　爾の車馬 弓矢戎兵を脩め
用戒戎作 用逷蠻方　用て戎の作るを戒め 用て蠻方を逷(とほざ)けよ

大雅・蕩之什「抑」

赫赫明明　赫赫明明として
王命卿士　王 卿士に命ず
南仲大祖　南仲大祖
大師皇父　大師皇父

整我六師　　我が六師を整へ
以脩我戎　　以て我が戎を脩めしむ
既敬既戒　　既に敬し既に戒め
惠此南國　　此の南國を惠め

大雅・蕩之什「常武」

以上「抑」や「常武」にみられる「脩」も「脩治」、つまり整備の意で捉え得る。繰り返しになるが、②「脩治」の用例は、対象をもつ動作として表現され、①「脩長」のような価値的な形容語ではない。つまり『詩經』に於いて「脩治」に分類し得る「脩」と「離騷」「好脩」に於ける「脩」とは、その表現に於いては異質である。しかしながら、「脩」自体が冀求されうる、「宜」しき結果を導く行為として表現されるという点で、内容に於いては、『詩經』の「脩治」例と「離騷」の「好脩」との間には共通性があるのではないだろうか。

次に③「脩德」の例を確認する。この「脩德」例は『詩經』中、①「脩長」・②「脩治」のいずれにも該当しない唯一の用例である。

無念爾祖　　爾の祖を念ふ無からんや
聿脩厥德　　厥の德を聿(の)べ脩む
永言配命　　永く言(ここ)に命を配し
自求多福　　自ら多福を求む
殷之未喪師　　殷の未だ師(もろもろ)を喪はざりしとき
克配上帝　　克く上帝に配せり
宜鑒于殷　　宜しく殷に鑒るべし
駿命不易　　駿命 易からず

大雅・文王之什「文王」

当該の「脩」について、箋には「王既述脩祖德。（王 既に祖の德を述べ脩む。）」とあり、朱熹『詩集傳』には、さらに具体的に「脩」の内容を示す。

言欲念爾祖、在於自修其德、
言ふこころは爾の祖を念はんと欲するは、自ら其の德を修むるに在り、

つまり、「自修其德」とは、「念爾祖」の条件であるといえる。『詩經』に於ける「脩」の用例の内、唯一「脩長」「脩治」に分類し得ない例である。「脩德」の例は、箋や朱熹『詩集傳』の解釈にも確認できるように、「德」という目的語をもつ動作である。「離騷」の「好脩」と「德」との関連については、先に引用した殷氏の指摘にも確認される。殷氏が指摘するように、「離騷」に於ける「好脩」が「德」と関連するのであるならば、この大雅・文王之什「文王」に見られる「脩」表現は、「離騷」の「好脩」表現と質的

な類似を認め得る可能性がある。すなわち、「德」を対象とするか否かが「脩」定義の一つの基準となるという質的類似である。表現の段階では相違があるが、それらの表現を支える中核的な要素として、「德」という共通性があるのではないかと推測する。しかしながら、本稿ではそれを論証する用意がない。特に「離騷」に於ける「好脩」について、「德」との関連を確定するだけの準備がない。これについては、推測を示すにのみ留め、別稿にて検討したい。

以上、「離騷」に先行する『詩經』にみた「脩」の用例についてまとめる。『詩經』中の全十例の「脩」の内、①「脩長」類…三例、②「脩治」類…六例、③「脩德」類…一例、となる。その内、「離騷」の「好脩」表現のような、価値的な形容語となり得るのは、①「脩長」類の内、「六月」「韓奕」の二例であった。この二例も充実さを表現する「脩」であり、示される価値も「離騷」の例と共通の要素を含むと考え得る。しかしながら、この二例は共に「四牡」の充実を示した「脩」である。したがって、自己の独自性を主張する「離騷」中の「好脩」表現とは必ずしも一致しない。また、「脩德」表現の例と、「離騷」の「好脩」表現とは、「德」を共通する要素として関連する可能性があるが、現段階でそれを積極的に肯定するだけの準備はない。ここまで、「離騷」の「好脩」表現と、『詩經』の「脩」表現とを比較し、「離騷」の「好脩」表現が特異であるとは言えないまでも、『詩經』の「脩」表現とは異質であることの傍証は得たように思われる。次項では、「離騷」以外の楚辭諸篇を対象に「脩」の検討を進める。

五、楚辭諸篇に於ける「脩」義

ここでは、「離騷」に於ける「好脩」の用例を確認した上で、価値的な形容語としての楚辭他篇に於ける「脩」用例を検討する。

「離騷」に於ける「脩」の用例は、「脩能」・「靈脩」（三例）・「脩名」・「前脩」（二例）・「好脩姱」・「脩吾初服」・「好脩」（五例）・「脩遠」（三例）・「蹇脩」・「信脩」など多様である。以上からは、前項で確認した『詩經』と比べ、「脩○」や「○脩」など、「離騷」に至って「脩」用例の幅の拡大が明確に見て取れる。この点からも「離騷」の「脩」表現の独自性を看取し得よう。しかし、本稿ではこれらの用例を一様に確認するのではなく、ここでは特に「好脩」の用例を確認したい。「離騷」「脩」については、「美」と対置される語として、嘗て拙稿に於いて些か言及したことがある。(9) い

ずれの例に於いても、基本的に「脩」とは「余」の冀求対象と言えよう。繰り返しになるが、本稿では、ひとまず「好脩」に限定して検討する。

a「獨」の表白としての「好脩」―「離騒」の例

「離騒」に於ける「好脩」表現の重要な要素として、他者との区別、換言すれば「獨」の表白が指摘できよう。それは以下の例などから確認できる。

民生各有所樂兮　　民生 各々樂(この)む所有り
余獨好脩以爲常　　余 獨り脩を好んで以て常と爲す

以上は先にも引用した句である。ここでは「民生」に対して「獨」である要素として、「好脩」が表現される。つまり「余」の「獨」の表白に於いて、「好脩」が自他を区別する特質として挙げられる。換言すれば、「好脩」とは、「余」の独自性を担保する表現であり、「離騒」に於ける「文学的個性」の発現に於いて、重要な表現の一つである可能性があろう。すなわち、「好脩」表現に対して、「離騒」受容者は「文学的個性」を見出すのではないだろうか。そして、この「獨」の表白としての「脩」冀求の表現は、先にも確認したように『詩經』には看取されない表現である。したがって、集団から発生した『詩經』と「文学的個性」を有するであろう「離騒」とには、「好脩」表現という一点から見ても、性質の相違を指摘し得よう。そして、この性質の相違が、「属人的個性」との結合や「文学的個性」発現の有無という点で、『詩經』と楚辭とを区分する要因となるのではないかと筆者は想定する。以上は仮説に留まるが、このような視点からも「好脩」が「離騒」の独自性の検討に於いて、重要な表現であると指摘できよう。以下に蔣驥『山帶閣注楚辭』に於ける、「好脩」対する注目すべき指摘を挙げる。

蓋通篇以好脩爲綱領、以從彭咸爲結穴。自篇首至「衆芳蕪穢」、序其以好脩而獲罪也、自「衆皆競進」至「前聖所厚」、序獲罪而不改其脩也。
（中略）
篇中曰「好脩」、曰「脩能」、曰「脩名」、曰「前脩」、曰「脩初服」、曰「信脩」、脩字凡十一見、首尾照應、眉目瞭然、絶非牽附之見。蓋好脩者其學也、爲彭咸者其忠也、不知好脩者、固不能爲彭咸。(10)
蓋し篇を通じて好脩を以て綱領と爲し、彭咸に從ふを以て結穴と爲さん。篇首より「衆芳蕪穢」に至るまで、其れ好脩を以てして罪を獲るを序べ、「衆皆競進」より「前聖所厚」に至るまで、罪を獲れども其の脩を改

めざるを序ぶ。

（中略）

篇中に「好脩」と曰ひ、「脩能」と曰ひ、「脩名」と曰ひ、「前脩」と曰ひ、「脩初服」と曰ひ、「信脩」と曰ひ、脩の字凡そ十一たび見はる、首尾照應して、眉目瞭然たり、絶えて牽附の見に非ず。蓋し好脩とは其れ學なり、彭咸と爲るとは其れ忠なり、好脩を知らざる者は、固に彭咸と爲る能はず。

蔣驥は「離騷」全体の綱領は「好脩」であると述べ、「離騷」に於ける「好脩」の重要性に言及する。すなわち「離騷」とは、「好脩」であるがために「獲罪」するも、「其脩」を改めない部分に全体の綱領があると、蔣驥は読み取るのである。楚辭に対する諸家の注釋に於いて、「好脩」に対して全体を通した綱領を見出した者は、管見の限り蔣驥のほかに見当たらない。蔣驥の以上の指摘は、「離騷」解釈に於ける「好脩」表現検討の重要性を示唆する。

次に、「余獨好脩以爲常」の例と同様に「獨」の表白としての「好脩」の例を挙げる。

汝何博謇而好脩兮　　汝何ぞ博謇として脩を好み
紛獨有此姱節　　紛として獨り此の姱節有るや

右は「女嬃」から「余」への呵問の様式をとった警告の一部である。すなわち、「好脩」であり「有姱節」であるから、「余」は他者と相容れないのであるとの指摘である。これに続く次の句にも他者と相容れない「獨」なる「余」が表現される。

薋菉葹以盈室兮　　薋・菉・葹以て室に盈てるに
判獨離而不服　　判として獨り離れて服せざる
衆不可戸說兮　　衆は戸ごとに說くべからず
孰云察余之中情　　孰か云に余の中情を察せん
世並舉而好朋兮　　世並びに舉つて朋を好めるに
夫何煢獨而不予聽　　夫れ何ぞ煢獨にして予に聽かざる

「薋菉葹」とは、いずれも悪草であり、それらから「余」は「獨」り離れる。悪草は自己と相容れない対象を象徴したものであり、それは「俗」や「衆」の象徴である。この点については拙稿に於いて既に指摘した。[11] ここでは「好朋」と「好脩」とが対照的に示される。「好朋」とは朋党を好み、「衆」であることを目指すこと。一方「好脩」であれば、「離騷」に於いては「煢獨」となるのである。王逸『楚辭章句』では、「煢獨」について以下のように指摘する。[12]

煢、孤也。詩曰「哀此煢獨。」言世俗之人、皆行佞僞、相與朋黨、並相薦舉。忠直之士、孤煢特獨、何肯聽用我言而納受之也。

煢は、孤なり。詩に曰く、「哀し此の煢獨」と。言ふこころは、世俗の人、皆佞僞を行ひて、相與に朋黨し、並びに相薦舉す。忠直の士は、孤煢特獨にして、何ぞ肯て我が言を聽用して、之れを納受せんや、と。

王逸の指摘する「孤煢特獨」たる「余」とは、「世俗之人」とは異なり、「皆行佞僞、相與朋黨、並相薦舉。」のような行為は働かない。それは、「余」が自己の「脩」を貫くことによる結果であろう。つまり、「脩」であることと、「皆行佞僞、相與朋黨、並相薦舉」を働くこととは、乖離した状態であることが指摘できる。以上に確認したのは、「好脩」が「獨」の表白となる例である。「離騷」に於いて、「好脩」とは自己と他者との区分であるからこそ、「皆行佞僞、相與朋黨、並相薦舉」を働くような他者とは相容れない「余」は、必然的に「獨」となる。換言すると、「余」にとっては、相容れない他者しか存在しない「離騷」に於いては、「獨」であることと「好脩」であることとが一致する。それは「莫好脩」を原因として「芳草」が悪草へと変化したという、以下の句からも逆説的に指摘できるだろう。

蘭芷變而不芳兮　　蘭芷　變じて芳しからず
荃蕙化而爲茅　　荃蕙　化して茅と爲る
何昔日之芳草兮　　何ぞ昔日の芳草
今直爲此蕭艾也　　今直ちに此の蕭艾と爲れる
豈其有他故兮　　豈に他故有らんや
莫好脩之害也　　脩を好む莫きの害なり

ここでは、「蘭芷」や「荃蕙」といった芳草から「茅」や「蕭艾」への化の理由を、他ではなく「莫好脩之害」であるとする。つまり、「好脩」であれば、芳草は悪草へと化さなかったであろうとの認識である。この部分について朱熹『楚辭集注』では、次のように指摘する。[13]

蕭艾、賤草、亦以喻不肖。世亂俗薄、士無常守、乃小人害之、而以爲「莫如好修之害」者、何哉。蓋由君子好脩、而小人嫉之、使不容於當世、故中材以下、莫不變化而從俗。則是其所以致此者、反無有如好脩之爲害也。東漢之亡、議者以爲黨錮諸賢之罪、蓋反其詞以深悲之、正屈原之意也。

蕭艾は、賤草なり。亦た以て不肖に喻ふ。世亂れ俗薄く、士に常の守無し。乃ち小人之れを害す。而して以爲へらく「莫如好修之害」とは、何ぞや。蓋し君子の好脩、而して小人之れを嫉みて、當世に容れざらしむるに由る。故に中材以下、變化して俗に從はざること莫ければ、則ち是れ其の此れを致す所以の者は、反つて好脩の害を爲すがごとくなること有る無きなり。東

漢の亡、議する者、以て黨錮諸賢の罪と爲すは、蓋し其の詞を反して、以て深く之れを悲しむ、正に屈原の意ならん。

朱熹は以上のように「君子」と「小人」とを並べて、「好脩」とそれ以外を区別する。「君子」と「小人」とは、勿論互いに相容れない存在であるから、やはり「離騒」に於ける「好脩」とは、「余」にとっての「獨」の表白と捉えられよう。また朱熹の語に注目すると、「君子」と「小人」との差は、「化」するか否かにある。つまり、「離騒」に於いては「化」する者は「好脩」なる者とはいえない。

b「九章」にみえる共通要素

「九歌」に於いて「脩」の用例を確認すると、唯一「山鬼」に「靈脩」の例があるのみである。「天問」に「脩」の用例はない。「九章」には、四例確認される。「離騒」（十八例）と比較するとその数には些か開きがある。「脩」の表現は、楚辭文藝に於ける特質というよりはむしろ、「離騒」に於ける特質といっても過言ではないであろう。それは出現数の問題だけではなく、「九章」に於ける「脩」の用例の検討からも指摘し得る。「哀郢」には「脩美」と表現される例がある。

憎愠惀之脩美兮　　愠惀の脩美を憎み
好夫人之忼慨　　夫の人の忼慨を好みす
衆踥蹀而日進兮　　衆は踥蹀として日に進み
美超遠而逾邁　　美は超遠にして逾邁す

この「脩美」は明らかに価値的な形容語である。「離騒」に於ける「内美」「脩能」を合わせたかのような表現をとり、「離騒」のように「衆」という他者との対比を描く。この「脩美」について各注釈に於いても、「離騒」に於ける「脩」と同様、詳細な言は付されない。「離騒」の用例の域を出ない表現であり、価値的な形容語としての要素を「離騒」と共有するといえる。つまり、「離騒」に於ける「好脩」を基準とした他者との区別、すなわち「獨」の表白という表現が「九章」にも看取される。「九章」の用例の検討によって、「離騒」に於ける「脩」表現と共通する要素が確認できる。

次の「抽思」の例もまた「離騒」と共通の表現である。

憍吾以其美好兮　　吾に憍るに其の美好を以てし
覽余以其脩姱　　余に覽（しめ）すに其の脩姱を以てし
與余言而不信兮　　余と言ひて信ならざるは
蓋爲余而造怒　　蓋し余が爲にして怒りを造せば

なり

「脩姱」の語は「離騷」にも確認できる。[14] ここまでに確認した例とは異なり、「余」自身の「脩」ではなく、「君」の「脩」である。しかしながら、「離騷」には「靈脩」という語で「余」以外を示す表現がある。「抽思」にみられる例もやはり、「離騷」の「脩」表現の域を出ない。先の「哀郢」にみた例でも同様であるが、「美」と「脩」との関連が強調される点も「離騷」と共通すると指摘できよう。

六、小結

以上、「離騷」の「好脩」理解のために検討を進めてきたが、ここまで述べたことをまとめて小結としたい。まず、第一の比較対象として先秦の諸子文献に「好脩」の例をとり、『荀子』に検討を加えた。『荀子』の用例は、「離騷」とは異なり、価値的な形容語ではなかった。しかしその内容については、「好脩」と非「好脩」とを軸とした対比表現に着眼し、「離騷」に於ける「好脩」表現との共通点を指摘した。

次に『詩經』を対象として、「離騷」に於ける「好脩」表現との比較を行った。『詩經』に於ける「脩」を①「脩長」②「脩治」③「脩德」の三つに分類し、①「脩長」に「離騷」と共通する、価値的な形容語としての性質を指摘した。また「德」に基づいて、『詩經』の一部の「脩」と「離騷」の「好脩」とが表現される可能性を指摘した。ただし両者の「脩」表現には相違があり、その相違こそが『詩經』に対する「離騷」の独自性を示す可能性を想定した。

最後に「離騷」と楚辭他篇とを対象に、「好脩」表現に検討を加えた。「離騷」に於ける「好脩」表現には、他者との区別、すなわち「獨」の表白という要素があると指摘した。また、「通篇以好脩爲綱領」という蔣驥の「離騷」読解の認識を紹介し、「好脩」表現の検討の意義について、その傍証を示した。さらに、「獨」の表白という「脩」の要素が、「九章」の用例などと共通することを確認した。

本稿に於ける検討から、「離騷」の「好脩」表現が「離騷」全体の綱領たる可能性を持つこと、そして「好脩」表現の重要な要素は「獨」の表白にあること、先行する文献に於いて「離騷」の「好脩」表現と一部は同質でありつつも、全く同様の例は確認されないことなどを指摘した。また「德」との関連について検討するべきであるという課題が遺った。

以上により、「離騷」に於ける「文学的個性」の一端が、

「好脩」表現として発現する可能性が指摘できたのではないだろうか。すなわち、「好脩」は「余」と他者との区別を明確にする。換言すれば、「好脩」の表白は、「離騒」に於いては「獨」の表白となる。ここに、「離騒」に於ける他者に対する個別性・特異性が現れ、「文学的個性」の発露へと連なるのではないか。

また「好脩」表現の検討を通して、「俗」や「獨」など、これまで検討を加えてきた表現との関連も窺われた。「離騒」に於ける「文学的個性」に対する、より精確な定義に向けて、今後はこれまで検討を加えた各表現を分類・総合する必要があろう。

今回は「好脩」の用例を先秦諸子文献に見たが、『荀子』の二例に留まり、対象がかなり限定された憾みがある。改めて諸子文献の「脩」のみの用例の確認や、経書に見られる用例との比較検討も必要であろう。さらに今回は先行する文献として『詩經』を取り上げたが、『古謡諺』や出土資料などに収録される言辞も、比較対象として組み入れる必要があろう。これらについては全て今後の課題とし、本稿では擱筆する。

注

(1)この他に徐志嘯氏「論屈原的〝好修〟——讀《離騒》札記」(『求索』・湖南省社会科学院・一九八九年・第一期)などがある。この論稿では、殷氏の論稿同様、「離騒」中の「脩」字を用例ごとに定義される。

(2)殷氏の表記に従い、当該論稿の紹介部分に於いては「修」で表記を統一する。

(3)以下『荀子』の底本には、『荀子集解』(王先謙撰・中華書局新編諸子集成・一九八八年)を使用した。

(4)王先謙は「民德、言不知禮義也。」とする。

(5)『荀子』と「離騒」とに於ける表現語彙の類似については、前掲の拙稿「楚辭「離騒」「俗」義初探」に於いて少しく指摘した。

(6)盧文弨曰、案「循正」本卷前作「修正」、似「修」字是。

(7)以下『詩經』の底本には、『毛詩正義』(重栞宋本十三經注疏附校勘記・藝文印書館・一九七九年七版)を使用し、『毛詩正義(十三經注疏)』(北京大學出版社・二〇〇〇年)を参照した。

(8)以下朱熹『詩集傳』の底本には、『詩集傳』(朱熹集註・臺灣中華書局・一九九六年十二版)を使用した。

(9)拙稿「楚辭「離騒」の「美」について」(『國學院中國學會報第六十六輯』・國學院大學中國學會・二〇二〇年十二月)に於いて、筆者は「内美」と「脩能」について、両者の相違を述べた。当

該の論稿では、「脩」を自意に拠って後天的に身につけるものと想定した。

(10)底本には、楚辭要籍叢刊『山帶閣注楚辭』（蔣驥撰・上海古籍出版社・二〇一九年）を使用した。当該の指摘は、「楚辭餘論卷上」「離騷」に確認できる。

(11)拙稿「楚辭「離騷」「俗」義初探」（『國學院中國學會報第六十七輯』・國學院大學中國學會・二〇二一年十二月）を参照されたい。

(12)底本には、楚辭要籍叢刊『楚辭補注』（洪興祖撰・上海古籍出版社・二〇一五年）を使用した。

(13)底本には、楚辭要籍叢刊『楚辭集注』（朱熹撰・上海古籍出版社・二〇一五年）を使用した。

(14)長太息以掩涕兮　哀民生之多艱　余雖好脩姱以鞿羈兮　謇朝誶而夕替

〔キーワード〕好脩、獨、離騷、荀子、詩經